ブランコアリス

あくた咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブランコアリス

【Ｎコード】
Ｎ５９４３Ｙ

【作者名】
あくた咲希

【あらすじ】
自ブログからの転載です。主にラストを手直ししています。

こどもの頃、公園でいつもブランコをこいでいた、外国の少女のような格好をしていたおばあさん。
久しぶりに訪れた公園で、私は彼女の幻と出会った。

亡くなったのだろうな、とは思っていた。
私が最後にその人の姿を見たのは二十年も前。私は都会の大学を出て社会人をやって寿退社して、出戻った二十七歳。
あの人は、当時すでにおばあさんだった。ふわふわと縮れた白髪がキュートな、たぶん少女時代のものだろう、エプロンドレスを着たおばあさん。公園の古びたブランコを彼女がこぐたびに、ドレスの裾が風をはらんで、外国の少女みたいなドロワースが見え隠れした。それは汚れなき白で、口汚い少年たちは馬鹿にしたものだが、私は憧れをもって眺めていた。そして、彼女のことを、ひそかに「アリス」と呼んでいた。
アリスは、いつもひとりだった。近所の大人たちが彼女を見るとき、妙に悲しげな表情になるのを、私は不思議な気持ちで見上げていた。

この公園を訪れたのは、もう十年以上ぶりだろうか。足を踏み入れた瞬間、ぷわんと、蒸した草の匂いが鼻をついた。初夏の、天気のいい昼下がりだ。見上げた空は、高みに向かうにつれ透明度を増すようだ。
公園は遊具がなくなって、こざっぱりとした、緑の園になっていた。
私は、かつてブランコがあったところに、まるで宝ものような光景を思い浮かべようとした。ペンキの剥げた赤い外枠、握ったてのひらに茶色の錆がつく鎖。たった一つぽっちの、朽ちかけた木のブランコ。
そこで、気持ちよさそうに宙を行ったりきたりする老いたアリス。鼻歌が聞こえてくる。皺だらけのアリスは、私に気づくと目を細めて笑いかける。

嬉しくなって、私は、淡く見えた幻へ近づいていった。アリスがブランコを譲ってくれた。鎖に指を触れ、そっと腰をおろす。木とは思えないやわらかな感触。

アリスが、私の頬を撫で、手をさすり、お腹のあたりをやさしくポンポンとたたいた。

ふわん、と体が前へ揺れた。アリスの片手が、私の背に添えられている。私たちは微笑みをかわし、頬に、風を、感じた。

体を支えていたものがなくなり、尻もちをついた。湿った音がしたと思ったら、生温かいぬかるみが下半身を汚している。辺りは暗く、木々があるわけでもないのに鬱蒼とした雰囲気があった。

アリスはいない。呼ぼうにも、本当の名を知らない。

途方に暮れて、のろのろと立ち上がった。ベタベタした泥を振り払っていると、いつのまにか私が、淡い青のドレスを着ていることに気づいた。少し歩いてゆくと、空からひらひらと白いエプロン。それは、差し出した両手にちょうど舞い降りてきた。

少し恥ずかしい気もしながら、私はアリスの衣装で進んでいった。青いドレスも、穿き心地のよいドロワースも、ころんとしたバレエシューズも泥で汚れていた。エプロンだけが眩いばかりの白で、闇の中で、ほんのりとお腹をあたたかくしてくれている。

うさぎも、鳥も、虫も、花も、猫も……何も存在しない場所だった。人間だって、やっぱり、いない。

私は、ここから、出れるのかしら。

不安というほどの不安ではなく、ここはちょっと暗くてべとべとしているだけで、そこまで不快ではない。歩くのをやめたら、ぬかるみが私を招き入れるだろうな、と予感していた。でも、それは恐怖ではなく……、かといって立ち止まることもできなかった。なんとなく、私は歩いてゆくしかなかったのだ。

どこまでも、どこまでも。

一向に晴れない闇は、心を蝕んでゆくだろうか。心が闇色の液体

で満たされたら、私は、違う一歩を踏み出すことができるかもしれない——

身震いがした。下腹を、刺すような痛みが襲った。ひどく冷たい何かが、体の中を降りてゆく感覚がした。

はっとしてドレスの裾をめくると、ドロワースに花びらのような赤が散っていた。いくつも、いくつも。花びらは数を増やしてゆき、融け合って、私の眩暈を引き起こす。

どうしたら、いいの。

私は、どちらを選択すればいいの？

私のお腹の中には、赤ちゃんがいるの……。

うずくまって、ひとしきり泣いて。

背を撫でる手にようやく気がついたのは、昼間の日差しに、すっかり首筋を焦がされたあとだった。

「……アリス？」

私が呼ばわると、彼女は困ったように顔をしわくちゃにした。首をかしげて、にっこり笑って、ブランコの幻ごと光の中に溶けてゆこうとする。

ねぇアリス、あなたはいつもブランコをこぎながら何を思っていたの？

大人たちがしていた、あなたにまつわる噂の意味。ひとり暮らしだった理由（わけ）。今頃になって、ようやくわかったかもしれない。

そしてあなたがなぜ、私の前に幻となって現れたのかも。

真っ白になって飽和した光が消え失せる頃には、私は覚悟を決めていた。

＊おわり＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5943y/

ブランコアリス

2011年11月20日18時59分発行